

佐伯 覚 (編)

《標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻》
義肢装具学

坂 井 一 浩
(日本義肢装具士協会, 会長)



私自身、義肢装具士職能団体の代表としてだけでなく臨床家として、また、養成教育においても理学療法士・作業療法士（以下、療法士）の方々との接点がある。この中で、よく耳にする「療法士の義肢装具離れ」が事実であるならば、義肢装具の利用者や義肢装具を必要とする人たちにとって憂慮すべきことである。リハにおけるチームアプローチの必要性というまでもないが、義肢や装具に関してもまさに、医師による適切な処方と療法士による正しい活用があって初めてその効果が発揮される。

実際にPTの養成課程において義肢装具学教育に携わってみると、到達目標の設定や具体的なコンテンツの構築に際し、何を基準に考えたらよいか逡巡する。参考にすべきは、やはり国家試験の出題傾向であろうか。一方で、それだけにとらわれてしまうと授業は無味乾燥になり、学生の義肢装具への興味づけを高めることは難し

くだろう。先に述べた「療法士の義肢装具離れ」が学生時代に始まってしまわないよう、教育者側には注意が必要である。義肢装具といっても、定義、分類、機能的な特徴や適応/禁忌を含めれば情報量は膨大なものとなる。加えて、新しい概念やテクノロジーの進歩をどのタイミングで教育コンテンツに反映させるべきか、悩ましいところである。

本書は、療法士の養成において「義肢装具学教育」が抱えるこれらのチャレンジの解決に役立つものである。多くの情報が、装具に関しては疾患/障害、義肢については切断レベルで方向づけされており、理解しやすい。また、付録に示されている模擬シラバスに従えば、本書を教科書として授業を進めていくうえで必要事項をどれもカバーすることができるであろう。このように、本書は義肢装具の基礎知識を学ぶ者にとって有用なガイドであるだけでなく、

Topics や Advanced Study の欄では臨床に役立つヒントや最新のエビデンスが紹介されており、現場の療法士の方々にとっても大いに役立つ内容となっている。

最後に私事で恐縮であるが、私が勤務する大学のPT学科の学生へ向けた義肢装具学実習の授業では、切断者や脳卒中片麻痺者を被験者として招き、学生が機能評価を行い、その結果に基づいて義肢/装具を提案し、提案に基づいて製作された義肢/装具の適合評価までを行わせている。ご存じの通り、義肢装具の適合の良否は、そのまま装着者の動作や運動に目に見えるかたちで現れる。療法士の方々の義肢装具への興味や関心をさらに高めるために、今後、本書のような優れた図書に視覚教材が付録されることを願っている。

〔 B5 判 256 頁 4,200 円 + 税 〕
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650